



2022年6月25日に一般社団法人協同総合研究所第10回(通算32回)通常総会が対面とオンラインのハイブリッド方式で開催し、対面14名、オンライン75名の参加でした。来期は協同労働・協同による社会デザインの可能性を探究するために、8つの研究テーマを推進することを確認する場となりました。メッセージとして、JCA(日本協同組合連携機構)、日本協同組合学会北川太一会長、暮らしと協同の研究所、高齢者協同組合連合会をはじめ、多くの団体、個人含めて70件を超えるメッセージを頂戴しました。メッセージには、協同総研・協同労働への期待・可能性が語られており、事務局一同、一つひとつの言葉に励まされました。この場を借りて、多くの会員のご参加とメッセージを賜ったことに感謝申し上げます。

総会後の総会記念フォーラムには、対面16人、オンライン88人が参加しました。「『協同労働』の多元的な価値と可能性を考える～研究者と実践者の共同研究がはじまる」がテーマでした。藤本穰彦常任理事がコーディネーターを行ない、3人の協同総研理事に自分の研究と協同労働を掛け合わせて話題提供をいただいた後、報告内容に沿ったコメントをワーカーズコープで働く実践者がしました。詳細は、次号の協同の発見誌に掲載しますが、研究者と実践者の共同研究を進める第一歩になったと考えています。

6月17日～19日に開催した日本労協連(ワーカーズコープ連合会)総会、センター事業団総代会でも感じましたが、今年10月

の労働者協同組合法施行にあたり、労働者協同組合や協同労働への期待が日に日に強くなってきていると感じます。それは法律ができ労働者協同組合や協同労働を知る人が増えてきたとともに、今まで協同労働や労働者協同組合が大切にしてきた「よい仕事」「失業者など一番弱い立場の人と連帯する」「コミュニティや社会をつくる」「自立し、協同し、愛を大切にする」「尊厳ある人間らしい労働をする」など、掲げてきた理念・原則に多くの人が共感し、今の社会に必要であること、それを実現したいと願う時代に入ってきたことを感じさせます。

他の協同組合で働く方々や協同組合を研究する研究者からも「ワーカーズコープの皆さん、元気で勢いがありますよね」という言葉をいただきます。「それはなぜですかね」と質問すると、「若い人が多く参加し、意見を言う」「自治体や地域のコミュニティに入り込んでいる」「『働くこと』『生きること』『人間とは』など根源的な問いを出せる、考え合える」などの意見をいただきます。3月6日に開催した協同労働・よい仕事研究交流集会2日目の分散会でコメントーターをしていただいた数人からは「分散会のコーディネーターがみんなにうまく話題を降るとともに、参加者全員がなんであれだけ話せるのか」という感想や質問を寄せられました。そのような場をつくる力、対話する力、問いあう力など、社会をつくり人と人とのつながりを強くする基本的姿勢や態度が、日々の団づくり(職場会議)や

集会などで、知らずのうちにワーカーズコープの仲間に身に付いて鍛えられていることを気付かされます。

現在、ロシアによるウクライナ侵攻から5カ月が経過し、その前からも予兆としてありましたが、世界は分断され物価が高騰し、市民生活が苦しくなっています。これは労働者協同組合の組合員にも出資金の取り崩す仲間も増えているなど影響が出ています。物価高騰への対応として生活支援金を就労者全員に支給していますが、同時に自分たちで食・エネルギーをつくり出す動きを加速させていくことが必要だと考えています。コロナ禍と物価高騰のなかで輸出などの外部に頼らず、地域で循環する社会が、市民や労働者が生き続ける術として少しずつ身につけていきたいです。その意味で、自分が働いている、暮らしている足元からの実践が大切だと考えています。

現在、私は三鷹のまちづくり研究員をしており、三鷹市内での労働者協同組合・協同労働の可能性について河村孝市長や7党派21人の市議の皆さんと懇談しました。その懇談のなかで三鷹産の野菜が市内の学校給食で多く使われ始めていることを聞きました。市民農園・市民体験農園に場所を借りたいけど、借りられず50組以上の待機者がいるとのことでした。コロナ禍となり、在宅で仕事をするなかで外で居場所をつくる、自然に触れ合いたいなどの理由で、暮らす場所で植物を育て、食べることを求めている市民の要求が多いと感じます。6月23日にJAはだのに都市農業を知るた

めに訪問しました。宮永均代表理事組合長からは秦野市では誰もが農に関わる仕組みをつくられていることをお聞きし、帰りに「湧く湧く体験農園」に訪問しました。そこでは中野区から通っている人、農に関わりたいために移住をしていた方もいることを聞きました。農がコモンズ(社会的共有財産)となり、地域の居場所になる大きな可能性を持っていることを感じました。そのなかで、労働者協同組合や協同労働が農の分野でどのような役割を果たせるのかは今後の大切な研究テーマであると感じています。

最後に、本号の特集を編集した者として一言記載して終わりにします。

沖縄は日本が明治以降、近代国家を歩むなかでの矛盾や不条理が表出され顕在化しやすい場所だと考えています。市民の自治、人権が蹂躪されてきた歴史があり、それは今も続いています。そこから真摯に何を学ぶのかが鋭く問われると考えています。私の祖先は明治時代、鹿児島から琉球処分をした側の官吏側として赴任し、その後台湾総督府で働きます。廃琉置県から140年以上、薩摩が侵攻し400年以上が経ちますが、私としては自分の祖先と当時の琉球の方々がどう思ったのかに想いを巡らせながら、本誌を通じて沖縄のあり方から日本社会のあり方を皆さんと考え合えることができれば幸いです。タイトなスケジュールのなか、取材・執筆・原稿のご確認をしていただいた方々に感謝申し上げます。